

「生きる力」をはぐくむ教育を進めるために

これからの社会に柔軟かつ的確に対応する教育を進めていくために、学校（幼稚園を含む。以下同じ）の組織と運営を適切に理解することが大切です。

今、学校は、いじめ、不登校など様々な課題を抱えています。こうした課題を早急に克服するとともに、一人一人の幼児児童生徒に、「生きる力」の育成を基本として、生涯学習の基盤をはぐくみ、充実した自己実現の場としての学校を創造していくことが求められています。

1 学校

(1) 学校とは

学校は、幼児児童生徒のための教育機関であり、学校（幼稚園を含む。以下同じ）教育の在り方、学校制度、教育内容、幼児児童生徒の入学（園）・卒業（園）などに関する各種の法令に基づいて設置・運営されている。公立の学校については施設・設備に関する行政上の規定の他、教職員の勤務については公務員として特別の規定がなされている。

学校は、国民や保護者から幼児児童生徒の教育を付託されて、公教育を実施していく場である。

そのため、学校では、教育関係諸法令及び幼稚園教育要領や学習指導要領に基づき、幼児児童生徒の実態や地域の特色を踏まえて学校の教育目標を定め、教育の目的を達成して社会や保護者の期待と信頼にこたえなければならない。

幼稚園

幼稚園の教育目標は、次代の担い手である幼児を育成するために、目指すべき望ましい人間像を理念として表現したものである。各園は、教育目標の実現のために教育課程などの教育計画を策定し、これに従って教育活動を実施していくのである。

そして、幼稚園におけるすべての教育活動は、これらの理念に基づいた園長の経営方針の下で施設・設備を有効に活用し、全教職員によって組織的計画的に行われるのであり、各教職員は組織の一員として、幼児の教育を推進するものである。（P.14～17「幼稚園教育要領と教育課程の編成」参照）

(2) 学校教育の在り方

学校は、人類が長い年月をかけて創造してきた学問や芸術、言語、価値観、行動様式などの文化を、次世代に伝えるという重要な役割をもっている。

第15期中央教育審議会第一次答申は、「教育においては、どんなに社会が変化しようとも、『時代を超えて変わらない価値のあるもの』（不易）がある。豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、こうしたものを子どもたちに培うことは、いつの時代、どこの国の教育においても大

切にされなければならない。」と述べている。

これからの学校においても、幼児児童生徒が自らの個性を存分に発揮しながら、時代を超えて変わらない価値のあるものを確実に身に付けられるよう指導していかねばならない。

他方で学校は、「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」(流行)にも柔軟に対応していかなければならない。

幼児児童生徒が、自己実現を図りながら、主体的に生きていくために必要な資質能力を身に付けるという視点から、教師は、不易と流行を十分踏まえた教育活動を進めていく必要がある。

(3) 生涯学習における 学校の役割

ア 生涯学習の基盤を 培う学校

学校教育は、生涯にわたる学習の基盤を培い、社会の激しい変化に主体的に対応できる心豊かな人間の育成に努めるという重要な役割を担っている。

人間が一生を通じて成長するための基盤を培い、社会の一員として望ましい人間性をはぐくむためには、知・徳・体のすべてにわたって調和のとれた発達を図ることが大切である。

したがって、学校(園)においては、自ら考え、主体的に判断し、表現したり、行動したりすることができる資質や能力を身に付けた幼児児童生徒を育成するため、基礎・基本を徹底して学力の充実・向上を図り、一人一人の個性を生かすための教育の充実に努めなければならない。また、生命を大切にする心、他人を思いやる心、正義感や公正さを重んじるなど豊かな人間性をはぐくむ「心の教育」の充実に努め、たくましく生きるための健康や体力の向上に努める必要がある。

イ 完全学校週5日制

完全学校週5日制は、幼児、児童及び生徒の家庭や地域社会での生活時間の比重を高めて、主体的に使える時間を増やし、「ゆとり」の中で、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに社会体験や自然体験などの様々な活動を経験させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくむことを目的としている。

学校においては、完全学校週5日制の趣旨を踏まえた教育活動の充実に ついて全教職員の共通理解を図り、教育課程や学校運営における工夫改善に取り組むことが重要であり、同時に開かれた学校づくりを推進する上からも、家庭や地域社会の理解と協力を得、連携することではじめてその趣旨を踏まえた教育活動の展開となることを十分認識しなければならない。

なお、地域社会全体で幼児児童生徒を育てる環境づくりの観点からも、教師は地域住民の一人として、地域社会の活動にボランティアとして参加したり、地域の幼児児童生徒との接触を深めたりすることが期待されている。

ウ 生涯学習の場としての学校

生涯学習における学校のもう一つの役割は、生涯学習機関としての学校が、様々な学習機会の場を提供することである。これからの生涯学習社会にあって、地域の人々の多様かつ高度な学習需要に対応できるよう、学校のもつ優れた人的・物的教育機能を生かした学習機会の場を積極的に提供していくことが大切である。

京都府においては、学校は教育の専門機関としての自覚に立ち、「京都OWN学習プラン」(京都府生涯学習振興基本構想)を指針として府立学校開放講座、体育施設開放事業などの実施や、地域の人材や学習素材の活用などを取り入れた教育課程など、特色ある教育実践が多くの学校で進められている。

生涯学習

生涯学習とは、人々が自己の充実や生活の向上のため、その自発的な意志に基づいて、必要に応じ自己に適した手段・方法を自ら選び、生涯を通じて行う学習であり、学校教育、社会教育、家庭教育をはじめ民間教育機関や企業が行う各種教育などを包括した広い概念である。したがって、生涯学習は、学校や社会の中で意図的・組織的に行われる学習活動だけではなく、文化・スポーツ・趣味・ボランティアなどの幅広い活動の中で行われる学習である。

生涯学習は、社会の成熟化に伴う学習需要の増大への対応から、その振興が求められている。人々が社会生活や家庭生活の中で、いつでも、どこでも、だれでも学ぶことができ、適正に学習の成果や蓄積が認められる生涯学習社会を築いていくことは、我が国全体の重要な課題となっている。

(4) 幼稚園・家庭・地域社会の連携

家庭・地域社会は、幼児の人間形成にとって最も基本的な役割を果たす場である。したがって、幼稚園は、家庭や地域の人々とともに幼児を育てていくという視点に立ち、幼稚園、家庭、地域社会がそれぞれ本来の教育機能を発揮し、相互にバランスのとれた教育が行われるよう、家庭、地域社会との連携を深め、幼稚園内外を通じた幼児の生活の充実と活性化を図ることが大切である。(開かれた園づくり)

幼稚園では、多様化している保護者と地域のニーズに応えられるよう、幼稚園運営の弾力化を図り、幼児教育の専門施設であるなどの特質を生かし地域の幼児教育のセンターとして子育て支援機能を一層発揮することが必要になっている。

また、幼稚園の教育方針や特色ある教育活動、幼児の状況などについて家庭や地域の人々に説明し理解や協力を求めたり、家庭や地域の人々の幼稚園運営などに対する意見を的確に把握し、自園の教育活動に生かしたりするこ

とが大切である。

具体的には、地域の人々を幼稚園に招待したり、幼児が地域の施設を利用したりする機会を通して、保護者や地域の人々が保育に参加する場を積極的につくりながら、広く幼稚園教育に対する理解を得るようにする必要がある。

(5) 特色ある幼稚園づくり

特色ある幼稚園づくりは、自園の教育目標を達成するために、各園が主体的に編成する教育課程に創意・工夫を加え、教育の活性化を図ることである。地域や幼稚園の実態及び幼児の心身の発達段階や特性等を十分考慮して、適切な教育課程を編成し、その効果的な実施に向けて取り組んでいかなければならない。

特色ある園づくりを進めていくためには、保護者や地域社会の人々の願いや期待にこたえるとともに理解と協力を得て、共に連携して進める態勢が重要である。

また、園の特色は日々の保育活動の積み重ねによって形成されるという点から、日々の保育を工夫し、改善を図っていくことが大切である。幼児が園生活に積極的に参加できるよう、創意工夫のある指導を展開することで、特色ある園づくりを進めることができる。

(6) 幼稚園の組織とその役割

幼稚園の教育目標は、実際に教育活動を担う一人一人の教職員によって実現される。調和のとれた園運営がなされ、個々の教員の活動が教育効果を上げるには、幼稚園の教育目標の実現に向かって組織として効果的に機能することが必要である。各園には、それぞれの実態に合わせて、園務分掌が設けられている。

ア 園務分掌

園務分掌とは

園務が円滑に行われるためには、仕事の分担が合理的に行われ、一定の組織と秩序のもとに処理されなければならない。園務分掌とは、こうした観点から、園長が組織を定め、教職員に園務を分担させ処理させることをいう。

園務分掌の内容

園務分掌の主な内容は、次のようなものである。

幼稚園教育の運営に関すること。

教育課程の編成、実施、改善に関すること。

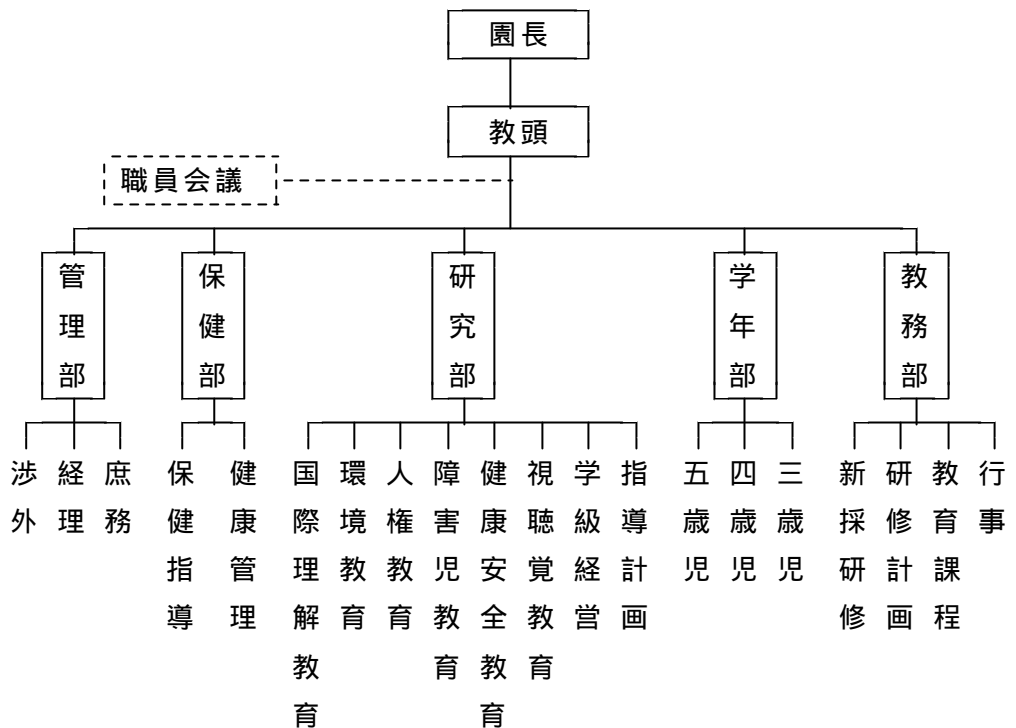
幼児の指導、管理に関すること。

幼児の保健安全に関すること。

幼稚園の施設・設備（教材遊具等を含む）に関すること。

地域・関係諸機関・団体等との連絡調整に関すること。

参考例として、次に、ある幼稚園の園務分掌組織表を示す。



園務分掌の運営

園務分掌を担当するに当たっては、以下の考え方に留意する。

全教職員がそれぞれ分担する園務について、園内組織全体の中で占める位置、役割、他の分掌との関連などを十分に理解するとともに、相互に協力し、組織的・有機的に活動処理していくことが、園務を遂行し、教育活動を展開していく上で重要である。

分担した園務の遂行に当たっては、幼稚園教育の目標達成に向けての、創意と工夫が必要であるとともに、それが組織全体に生かされることが大切である。したがって、他の分掌との連携を十分に図りながら、教職員間の好ましい人間関係をつくるように心がけ、自分の職責遂行に努めなければならない。

イ 職員会議等

職員会議は、園運営を円滑かつ効果的に行うため、園長が必要に応じ招集し主宰するもので、所属職員の意見を聞いたり、運営方針を周知徹底させたり、職員相互の事務連絡を図るなど園長の職務執行上の補助機関として位置付けられるものである。

(学校教育法施行規則第23の2,第77条)

(京都府立学校の管理運営に関する規則)

(各市町村立小学校及び中学校の管理運営に関する規則)

職員会議をはじめとする諸会議に臨む心構えは、次のとおりである。

開始時刻に遅れない。

会議資料を整理し保管する。なお、職務上知り得た秘密を漏らさない。

(関連法規/地方公務員法第34条-秘密を守る義務)

園長の指示や会議の内容の要点を記録する。

出席できない場合は、事前に連絡するとともに会議録や資料などで会議の内容の熟知に努める。

(7) 学級経営とは

幼児一人一人が、園や学級の中で安定した気持ちと存在感をもって生活していけるようにすることが園・学級経営の基本である。

学級経営は、園経営や学年経営の基本的な経営方針を受けて、学級を担任する教員が、学級の実態を正しく把握し、幼児との人間関係を深めながら、より健全な学級集団を育てていく日常的な教育の営みである。

また、幼児は学級の一員として生活し学ぶのであるから、教員は学級の人間関係や学級の特徴などを的確につかみ、好ましい学級づくりに努めなければならない。

教育目標の達成を目指し、好ましい学級経営を行うには、次のようなことに留意したい。

一人一人の幼児理解に努め、心のきずなを結ぶこと。

幼児の個々の実態や集団の一員としての育ちを的確に把握し、学級経営方針に基づいた経営に努めること。

幼児が快適な生活を送ることのできる場や、様々な活動を生み出しやすい教育環境の工夫や整備に心がけること。

幼稚園幼児指導要録の記入、管理などをはじめとする学級の実務を適時適切に処理すること。

家庭・地域社会との連携を密にすること。

(8) 学級事務

学級事務とは、常に教育活動を円滑に進めるために必要な学級の指導に伴う事務や付随する一切の事務をいう。その処理は、遅滞なく能率的に行うことが大切である。教員の第一義的活動である指導・援助をより効率的にするためにも、学級事務の効率的な処理と併せて適正な文書管理が要求される。

次に、学級事務の内容をあげてみると、およそ次のようになる。

ア 学級事務の内容

年度始めの事務

幼児名簿（各園で指示された形式による）の作成

諸表簿等の整備

入園願、幼児生活調査票、出席簿、指導記録、集金簿、諸費集金簿、幼稚園幼児指導要録、健康診断票、歯の検査表

園の時程表（1日・半日）、年間保育指導計画案、月案、週案、日案の作成

新・旧担任の事務引継

表簿類の記載だけでなく、指導上配慮を要する事項は、十分に連絡しておく。

日々の事務 日々行う学級事務は、教育活動を円滑に進めるためのものであるから、手
順良くその日のうちに処理し、翌日に持ち越さないようにすることが大切で
ある。

出席簿の処理と幼児の観察記録
日案の反省と作成
提出物の処理、家庭との連絡事務
防火・安全点検の実施、環境整備、その他

週間の事務 週案、週の記録と反省、その他

月間の事務 出席簿の月末統計と整理
出席カードの整理
集金事務等の整理（注 領収書等を整理保存すること。）

学期末の事務 諸表簿の整理（出席簿・会計簿等）

年度末の事務 幼稚園幼児指導要録・指導要録抄本など表簿の整理
年間出席統計
金銭関係事務
その他分掌担当事務の処理

幼稚園幼児指導要録、健康診断票、歯の検査表、幼児観察記録簿などは、
園外に持ち出してはならない。記入は園内で行い、プライバシーの保護に留
意して保管する。

イ 幼稚園幼児指導要録 幼稚園幼児指導要録は学校教育法施行規則第 12 条 3「校長はその学校に
在学する児童等の指導要録を作成しなければならない。」によって園で作成
する重要な法定表簿の一つであり、幼児の学籍並びに指導の過程及び結果の
要約を記録した原簿である。

幼児が転園した場合は原本の写しを作成し、それを転園先に送付する。送
付された幼稚園は、この写しを基に当該幼児の指導要録の原本を作成する。
なお、転出した幼児の原本については、転出簿に整理、保管するなど、法に
定められた手続きをしなければならない。

指導要録には二つの性格がある。その一つは指導の過程及びその結果を要
約し記録した原簿としての性格であり、他の一つは外部に対する学籍の証明
としての性格である。そのため指導要録はその取り扱い上、厳正に保存管理
され、適切に指導に役立たせなければならない。また、指導の記録は、決し
て固定的なものではなく、成長や発達によって可動的なものにとらえる必要
があり、その一方で、学籍証明には、相当長期間の保存が必要となってくる。
したがって、プライバシーの保護や人権へのかわりを考慮して、「学籍の

記録」と「指導の記録」を別にして編成し、その保存期間を前者は20年、後者は5年としている。

(9) 小学校教育との連携

幼稚園は、学校教育の一環として、幼児期にふさわしい教育を行うものである。その教育が、小学校以降の生活や学習の基盤ともなる。

幼児が成長発達を遂げる過程で、幼稚園から小学校への移行が円滑に行われることは重要である。幼児期から児童期への発達の流れを考え、幼稚園独自の意義と役割を十分果たすことによって、小学校における教育との接続を確かなものにするのが大切である。

幼稚園においては、健康な身体や豊かな人間性ととも、幼児期の特性としての自発性、意欲、豊かな感情、物事に対する興味や関心、表現力、主体的な生活態度など小学校以降における学習や発達の基盤となるものをしっかり育てたい。幼児期にふさわしい生活体験を豊富にすることを通してこれらの育成を図り、将来の体系的な学習と創造的な思考を実りあるものとする必要がある。その際、幼稚園と小学校の諸活動の交流を積極的に行うことにより、互いに認識を深め合っていくことも大切である。

かねてから小学校低学年においては、教育課程の実施の経験やこの時期の児童の心身の発達の状況などからみて、教育内容を分化して指導するよりも、児童の具体的な活動を通し総合的に指導する方が、教育の目標を達成するのにより有効であるといわれている。特に、小学校「生活科」では、幼稚園と小学校の学習活動とが円滑に結びつくようにすることを大切に考えている。その意味でも、幼稚園と小学校の連携を図り、幼稚園生活で得た体験がやがて小学校以降の学習を行う際に、様々な面で生かされるようにしたい。

このような円滑な接続を図るためには、幼稚園と小学校の教師が互いの教育の在り方について十分理解をするとともに、幼児・児童間、保護者間の交流を進め、互いの理解の共通化を進めていく必要がある。

2 幼稚園教育要領と 教育課程の編成

幼稚園教育は、幼児の特性を踏まえ、環境を通して行われるものである。このことを基本とし、「よりよい保育」の創造を日々追求していくことは、いつの時代にあっても重要な課題である。ここでは、これを進める基になる教育課程と、各領域の内容と指導の在り方について述べる。

(1) 幼稚園教育要領

幼稚園教育要領は、学校教育法によって示された幼稚園教育の目的、目標を更に具体化して、教育課程の基準を示したものである。その内容は「総則」「ねらい及び内容」「指導計画作成上の留意事項」によって構成されている。

「総則」では、〔幼稚園教育の基本〕、〔幼稚園教育の目標〕、〔教育課程の編成〕について示されている。

〔幼稚園教育の基本〕では、幼稚園教育の理解の徹底を図り、より適切な実践を確保するために、幼稚園教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うことが基本であることを示している。

〔幼稚園教育の目標〕では、幼児期が生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期であることを踏まえ、幼稚園生活を通して生きる力の基礎を育成するよう目標達成に努めなければならないと述べ、5つの目標を示している。

健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。

人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。

自然など身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。

日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。

多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること。

「教育課程の編成」では、教育要領に示すねらいが総合的に達成されるように、具体的なねらいと内容を組織することにより編成するものとされている。また、幼稚園の実態や社会情勢に弾力的に対応できるようにするとともに、「毎学年の教育週数は、特別の事情のある場合を除き、39週を下ってはならない。」と定められている。

また、「1日の教育時間は、4時間を標準とすること。ただし、幼児の心身の発達や季節などに適切に配慮すること。」となっている。

「ねらい及び内容」では、各幼稚園において実態に応じ、何を意図してどのような指導を行ったらよいか、教育内容、領域の構成などについて述べられて、具体的な教育目標を示す「ねらい」と、それを達成するために教員が指導するものである「内容」とが示されている。

「領域」では、総合的な指導を行うために教員がもつ視点をより明確にするため、幼児が発達していく姿をとらえるという観点から5領域を構成して

いる。(p.16 参照)

「指導計画作成上の留意事項」では、指導計画作成全般にわたる留意事項を「1 一般的な留意事項」、特定の指導内容に関する留意事項を「2 特に留意する事項」として、基本的な内容に重点をおいて示している。

(2) 教育課程の意義

幼稚園において編成すべき教育課程は、幼稚園教育の目的、目標を達成するために、幼児の発達を見通して、それぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行うための教育活動の全体計画である。編成に当たっては、環境を通して行うという幼稚園教育の基本を踏まえて、幼児の発達や生活の実情などに応じた具体的な指導の順序や方法をあらかじめ定めた指導計画を作成して、指導を行う必要があり、教育課程は指導計画を立案する際の骨格となるものである。

そのためには、幼稚園教育の内容と方法及び幼児の発達と生活についての十分な理解をもつことが大切である。

幼稚園教育要領は、学校教育法第 79 条、学校教育法施行規則第 76 条に規定されているとおり、幼稚園教育課程の基準である。

したがって、それぞれの幼稚園においては、この幼稚園教育要領に述べられていることを基として、幼児の心身の発達と、幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成しなければならない。

また、教育課程はそれぞれの幼稚園において、全教職員の協力の下に園長の責任において編成するものである。

(3) 教育課程の編成

幼稚園教育要領第 1 章総則に、次のことがあげられている。

各幼稚園においては、(編成の主体)

法令及びこの幼稚園教育要領の示すところに従い、(編成の基準)

創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した、(編成の条件)

適切な教育課程を編成するものとする。(編成の行為)

幼稚園の教育課程の編成については、幼稚園教育要領に基づいて行われるもので、全教職員がそれぞれに示されていることについて十分に理解を深めると同時に、実践を通して幼児の実情に即した教育課程となるようにすることが大切である。

そのためには、幼児の発達の過程や実情を的確に把握しなければならない。また、幼児の生活や発達に大きな影響を与える地域環境や幼稚園の人的、物的条件など、地域や幼稚園の実態及び特色を十分に生かした創意ある教育課程を編成しなければならない。

幼稚園教育要領において、教育課程について次のように述べている。

幼稚園生活の全体を通して第2章に示すねらいが総合的に達成されるよう、教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織しなければならないこと。この場合においては、特に、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮しなければならないこと。

編成の手順の一例をあげる。

各幼稚園の教育目標に関する共通理解を図る。

現在の教育課題や目指す幼児像を明確にする。

編成に必要な基礎的事項についての理解を深める。

関係法令の内容と、地域の実態、幼児の発達及び社会の要請や保護者の願いを把握する。

幼児の発達の過程を見通す。

幼稚園生活の全体を通して、幼児がどのような発達をするのかを探り、長期的に見通す。幼児の発達過程に応じて、教育目標がどのように達成されているかを予測する。

具体的なねらいと内容を組織する。

幼児の発達の各時期にふさわしい生活が展開できるよう内容を設定する。その際、幼稚園教育要領の第2章に示す事項が総合的に実施され、教育目標が達成できるようにする。

教育課程を実施した結果を反省・評価し、次の編成に生かす。

(4) 各領域のねらいと内容

幼稚園教育要領では、幼稚園教育が何を意図して行われるかを明確にするため、「ねらい」と「内容」を分けて示し、幼児の生活を通して総合的な指導が適切に行われるための指針としている。そして、「ねらい」は幼稚園教育全体を通して幼児に育つことが期待される心情、意欲、態度などであり、「内容」は「ねらい」を達成するために教員が指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものであるとしている。幼稚園における指導は、幼児が発達に必要な経験を得られるように適切に援助を行うことである。具体的な内容は幼児が経験し身に付ける内容であり、同時に、教員が指導する内容であることができる。このような「ねらい」と「内容」を、幼児の発達の側面からまとめて、次の五つの領域を編成している。

- 1 心身の健康に関する領域「健康」
- 2 人とのかかわりに関する領域「人間関係」
- 3 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
- 4 言葉の獲得に関する領域「言葉」
- 5 感性と表現に関する領域「表現」

なお、幼児の発達には様々な側面が絡み合って相互に影響を与えながら遂げられていくものであるため、各領域は、それぞれ独立した教育課程を編成したり、特定の活動と結び付けて指導したりすることのないように配慮する。各領域については、次のような性格からねらいと内容がまとめられている。

領 域	性 格
1 心身の健康に関する領域「健康」	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
2 人とのかかわりに関する領域「人間関係」	他の人々と親しみ支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。
3 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」	周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
4 言葉の獲得に関する領域「言葉」	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
5 感性と表現に関する領域「表現」	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

3 幼児理解

(1) 幼児理解とは

幼児は、好奇心にあふれ、感受性に富み、既成の概念や約束ごとに縛られずに、思いついたらじっとしていらなくなるという活動性をもっており、頭でわかるだけでなく、体全体で納得するものである。また、幼児は、活動において「できる、できない。」というよりもやっているプロセスを楽しみ、味わうものである。すなわち、幼児は主体的に活動しようとするなどの特性がある。

多くの幼児にとって幼稚園生活は、家庭から離れて同年代の幼児と一緒に過ごす初めての集団生活である。それまでの生活と異なる新たな生活の広がりに対して、期待と同時に緊張感や不安感をもっていることが多い。それぞれの幼児が幼稚園で安心して生活し、健やかに発達するためには、教員は、幼児の行動を温かく見守り、適切な援助を行うことが必要である。

そのために教員は、個々の幼児の家庭や地域社会での生活実態を把握し、幼児と信頼関係を築くことが大切である。幼児理解には、こうした外面的理解と、幼児が自分の生活体験を基に、興味や関心をもった周囲の環境に働きかけ、自分の生活を広げていく姿を理解する内面的理解がある。

保育は一人一人の幼児が発達を促す営みである。そのためには幼児の生活する姿をとらえることが出発点となる。

具体的な生活の中で、幼児の興味や関心がどのように広げられたり高められたりしているのか、遊びの傾向はどう変化しているのか、あるいは生活にどのように取り込んでいるのかなど、目に見えるありさまだけでなく幼児の内面の動きまで含めて、生活における全体的な変化から発達をとらえることが大切になる。そのためには幼児と生活を共にしながら、何に興味があり、何を実現しようとしているのかなど、活動の様子とともに幼児の気持ちを感じ取っていく必要がある。また幼児の発見、感動、ものの見方や考え方を受け止めながら、それがどのような状況のもとで起きたか、なぜそのような言動につながったかなど、幼児にとっての意味を考えていくことが大切である。

幼児の内面理解は幼児の能動的な活動を基に、一人一人の幼児が発達に必要な経験を得られるよう、発達の実情や生活の流れなどに即して環境を構成するために大切なことである。そのことは、とりもなおさず個のよさや幼児期の特性や発達の課題を踏まえるという幼稚園教育の基本にかかわるものである。このように幼稚園教育は、「幼児を理解すること」から出発するものである。

幼児の発達を促すために、まず教員が果たさなければならない役割は、幼稚園生活の全体を通して幼児一人一人の発達段階を的確に把握し、それぞれの幼児の特性や発達の課題をとらえることであるといえる。

(2) 幼児期の心身の発達

人間は他の動物に比べ、形態的にも機能的・活動的にも未熟な状態で生まれてくる。他の動物は出生時から比較的独立して生活できる力をもっている

のに比べ、人間は「生理的早産」といわれるように、周りの人たちの援助によって成長発達を遂げる。この場合、発達とは、人間は生まれながらにして持っている自然に成長していく力と、心身の成長に伴い周囲の環境に自ら能動的に働きかけようとする力を相互に作用させ、その環境とかがわり合う中で生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程といわれている。

能力や態度の獲得については、どちらかといえば大人から教えられたとおりに覚えていくという側面が強調されてきたが、最近では、幼児自身が自発的・能動的に環境にがわりながら、生活の中で状況と関連付けて身に付けていく側面の重要性も指摘されている。したがって、遊びを中心とした生活の中で、幼児自身が自らの生活と関連付けながら、好奇心を抱くこと、必要感をもつことが重要である。

幼稚園教育は、幼児の育ちを知ることから始まる。幼児一人一人の発達特性を理解する事が重要である。「何歳では何ができる」「何歳何ヶ月では何々のことが分かる」といった多くの幼児が示す発達の姿に合わせて、すべての幼児を一律に見てしまうことのないようにすることが大切である。

幼稚園教育要領では、第1章総則1幼稚園教育の基本(3)「幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い多様な経過をたどって成し遂げられていく……」と個々の幼児の実態を踏まえることが大切であるとしている。

健康な心と体

次に、幼児期に大切にしなければならない発達の側面をあげる。幼児期は、身体が発育するとともに運動機能が急速に発達する。また、安定した情緒のもとで身近に関する自立として、排泄や食事、衣服の着脱や清潔など、生活に必要な基本的な生活習慣が確立されることによって、幼児の活動が著しく高まる。そして、全身で物事に取り組むことが、心身の諸側面を発達させる。

人とのがわり

3歳ぐらいになると、次第に自分でやりたいという気持ちが強くなり自己主張が始まる。依存していた大人に反抗したり、自己中心的で自分と他者の欲求が調整できず「けんか」になることがある。こうして、人とのがわりに不安感をもつと大人に依存し、安定すると他者とがわる楽しさを味わい、関心・共感や思いやり等をもつようになり、そして、自立心や社会性を身に付けていく。

環境へのがわり

幼児は、自分のそれまでの生活体験によって親しんだ具体的なものを手がかりにして、環境から多くのことを吸収するとともに、主体的にがわり、働きかけることによって、さらにそれを変える力をもってくる。

言葉

1歳過ぎから獲得しはじめた言葉によるコミュニケーションによって、語彙や文をさらに獲得していく。この際、心の発達を支えにすることがないと、言葉が形骸化することがある。

なお、言葉の発達は個人差が大きく、精神的な状況によって左右されるこ

ともあるので、一人一人を十分に把握することが必要である。

表現する力

誰でも心の中の世界を外に表そうという欲求をもっている。また、表現することによって活動の幅を広げることできる。乳児期は、泣く、笑う、手足を動かすなどであるが、幼児期になると、言葉や身振りの他に道具を用いて自分のイメージにかなった自己表現を身に付ける。その場合、自分なりに感じ、考える心が育っていることが大切である。

(3) 幼児理解の方法

ア 幼児を理解するには遊びや生活の様子からとらえる

総合的に理解すること

幼児の様子をただ漠然と見ているのではなく、幼児とかかわりながら行動や心の動きを含めて総合的にとらえることが大切である。

気持ちを理解すること

幼児の気持ちを理解するということは、実際にその幼児の気持ちにふれて喜びや悲しみを共有することまでを含めた行為であるといえる。

遊びを理解すること

遊びは、「時間・空間・仲間」の要素によって成立するものである。したがって、次の点から遊びをとらえることが大切である。

- ・ 前述の三つの要素の視点を通して、遊びをとらえる。
- ・ 興味や関心の変化をとらえる。
- ・ 人間関係の変化をとらえる。

生活を理解すること

幼児期の生活のほとんどは、幼児が主体的に環境にかかわって心と体を働かせる活動であり、遊びを含む生活が重要な部分を占めていると考えることが大切である。

- ・ 生活行動に着目する。
- ・ 自我の発達をとらえる。

イ 幼児理解するための要点

成長を把握する

入園前の身体検査結果や面接時の所見、今までの幼稚園幼児指導要録、前担任の記録、健康診断票及び保育園との連絡などを通して幼児の成長を把握する。

家庭環境を把握する

家庭訪問、参観日、送迎の際に出会うときなど保護者と話し合う機会を通して家庭での様子を知る。

一人一人の幼児や学級の特徴について把握する

いろいろな場や活動を通して知った一人一人の幼児の実態や学級としての特徴を十分認識し、具体的なねらいをもって保育を進めていくことが大切である。また、学級の特徴は、次のような具体的な観点からとらえ、分析し、検討することによって知ることができる。

- ・全体的に明るくて楽しい雰囲気であるか。
- ・一人一人が安定し、自己を発揮しているか。
- ・好ましい人間関係が育っているか。
- ・園生活の中で約束や規律を守ろうとしているか。
- ・障害がある幼児の実態の把握と指導ができているか。
- ・問題行動の傾向がある幼児の課題の把握と指導ができているか。
- ・全園児や学級内での幼児に、どのような力が育ってきたか。また、今後の課題は何か。

(4) 発達を促す援助

ア 発達を促す能動性の発揮

幼児期の発達を促すためには、次のようなものが必要であると考えられる。幼児は、興味や関心をもったことに対して自分からかかわろうとする。したがって、このような能動性を十分発揮できる対象や時間、場などを用意することが必要である。また、そのような幼児の行動や心の動きを適切に援助をする大人の存在が大切である。

イ 発達に応じた環境からの刺激

幼児は環境との相互作用によって発達に必要な経験を積み重ねていく。発達を促すためには、活動の展開によって柔軟に変化し、幼児の興味や関心に応じて必要な刺激が得られるような応答性のある環境が必要である。

ウ 発達を促す援助を行う

幼児期は身体的な発達の基礎ができ上がり、また行動範囲の拡大に伴って情緒や社会性といった人格の基礎が確立してだけでなく、好奇心や探求心といった知的な面も急速に発達していく。更に日常の基本的な生活習慣も徐々に形成され、その生活が自立し始める時期である。それだけに個々の発達に応じた適切な援助が必要になる。

幼稚園における指導は、幼児の発達に必要な経験が得られるように「適切な援助」を行うことである。その適切な援助を行うためには、幼稚園生活の全体を通して、幼児一人一人の発達の特性や発達の課題をとらえるとともに、次のことを大切にしたい。

幼児の行動や発見、努力、工夫、感動などを温かく受け止めて認めたり、共感したり励ましたりして心を通わせる。

常に一人一人の幼児の発達や内面の動きを的確に把握し、興味や関心、欲求の方向性を知る。

幼児の生活の流れや発達などに応じた、具体的なねらいや内容にふさわしい環境をつくり出す。

環境に幼児が主体的にかかわり、生活を展開させているかどうかを確認しながら、そこに現れた幼児の姿によって、教員の意図を修正し、環境を適切なものにしていく柔軟性をもつこと。

幼児の展開する活動に対して必要な助言、指示、承認、共感、励ましなどを行う。

教員の思いや願いのみが先行することなく、幼児の主体性を尊重し幼児の言葉や行動を受け止めたり、活動に働きかけたりするように努める。

「適切な援助者」として望ましい姿勢は、幼児一人一人のよさや可能性を見出し、ありのままを受け入れることである。

(5) 幼児児童生徒を取り巻く環境の変化と問題行動

幼児の健やかな成長のためには、家庭や地域社会において様々な体験を重ねることが必要であると言われている。しかし、今日の社会の急速な変化は、幼児児童生徒を取り巻く環境にも大きな変化をもたらした。幼児児童生徒は物質的な豊かさや便利さの中で生活する一方、時間的にも精神的にもゆとりのない忙しい生活を送り、十分な生活体験や自然体験を得られない状況がみられるようになった。このような状況の中で、人間関係を築く力が弱いなど社会性の不足や規範意識の低下、自立の遅れなど、様々な問題が指摘されている。

児童生徒の問題行動は、いじめの深刻さ、薬物乱用及び性の逸脱行動の増加、低年齢化、凶悪・粗暴化など多様化している。また、「学級がうまく機能しない状況」(いわゆる「学級崩壊」)が、新たな教育課題となっている。

それらの要因の一つとして、幼児期の課題の積み残しがあるとの指摘があり、望ましい乳幼児期からの子育て・教育の在り方を家庭や地域社会とともに考えていくことが大切である。さらに人格形成の基礎を培う幼稚園教育においては、幼児の実態を十分把握分析し、すべての幼児の自己実現にむけて援助し、成長発達を促す指導を行わなければならない。

問題行動の特徴

幼児期は、自分の欲求によって行動することが多いが、常に自分の欲求が満たされるわけではない。周りの関係によって欲求不満や葛藤が起こり、それが長く続き耐えられなくなると身体症状となって現れることが多い。よく見られる症状として、腹痛、頻尿、遺尿、下痢、夜驚、チック、指しゃぶり、異食などがある。こういった状況は誰にでも起こりうることであるが、それが短期間で解消されずに長く引き続くと、神経性習癖となる。

また、その他に、登園しぶり、場面かん黙、粗暴といったものも見られる。個々様々な要因によって、こうした問題が起こっているのであるが、援助・指導に当たっては、内面理解に努めることが大切である。

(6) 幼児との信頼関係を築くには

幼児は、自分が教員にいつも温かく見守られ、受け入れられているという安心感が得られると、自分から周囲に働きかけ、遊びや生活ができるようになる。つまり、幼児が主体性を十分に発揮して幼稚園生活を過ごすためには、教員と幼児の間に信頼関係が築かれ、幼児の情緒が安定していることが大切である。

幼児との信頼関係は、教員が幼児と生活をともにしながら、幼児の行動や努力、工夫、発見、感動などを温かく受け止めて、認めたり共感したり励ましたりして心を通わせる中で育てられていくものである。こうした教員の営

みは、幼児を理解するための大切な姿勢であり、幼児の活動が望ましい方向に展開するための援助でもあるといえる。教員と幼児との間に強い信頼関係があってこそ教育の効果も期待できる。

幼児と信頼関係を築くためには特に、次のようなことに留意することが大切である。

常に幼児の内面を理解しようと努める。

幼児の内面を理解するとは、幼児の気持ちを理解していくことでもあるといえる。そのためには、幼児の言動を表面的に見るのではなく、その言動によって何を訴えようとしているのかというような内面を理解しようと努めることが大切である。

優しさ、厳しさの両面をもって接する。

幼児のよい面、一生懸命努力している点、よくなった面を認め、今後とも努力していこうと思えるよう励ます。困っていることや悩んでいることを一緒に考え、適切な援助をする。「　　ちゃん、どうしたの。」など優しく言葉をかけられることで、幼児は、心を開いて何でも話そうと思うようになり、信頼関係が深まるものである。ただし、してはいけないことなどに対しては、理由を理解できるようにはっきりと知らせ、温かく見守ることが大切である。

愛情と熱意をもって指導に当たる。

幼児とふれ合ったり、話し合ったりするときは、いつも「わたしのこと、分かってくれている。」「大切にされている。」と、感じられるように接し、どのような場面においても、どのようなときにも心を通わせて指導に当たることが、幼児との信頼関係を深くするものである。

一人一人の幼児を大切にする。

幼児は、それぞれ個性をもっている。その一人一人の持ち味を認め、それを育て、生かしていくことは、教育がもつ不易の理想であるといえる。このことは、学級全体、ひいては園全体の信頼を高めることになるのである。

保護者との信頼関係を深める。

幼児との信頼関係を深めることは、保護者との信頼関係を深めることと切り離して考えることはできない。教員が保護者から不信感をもたれると、幼児との信頼関係もくずれていく原因になりかねないため、十分留意することが大切である。

(7) 教育相談

すべての幼児が健やかに成長発達するため、カウンセリングの理論や方法に基づいて相談活動や助言・援助することが教育相談である。

幼児の問題行動は、言葉で表すことのできない心の内面や人格形成上の課題を表しているものであり、周りの者に援助を求めるサインである。このサインを見落とすことなく理解し、悩みや問題を解決することが必要である。

教育相談が機能するためには、日頃から各園において、すべての教員が次

のことなどに配慮することが重要である。

幼児の立場に立つこと

愛情をもって接し、よい所を伸ばすように励ますなど幼児との間に信頼関係を築く。

共感的態度であること

幼児の気持ちや感情をありのままに受容し、一方的に決めつけたり価値を押し付けたりしないよう教育活動を行う。

一致した指導体制であること

園内の教員が個々の幼児の具体的な実情を交換し、正しい理解をもつよう努める。

保護者との連携を図ること

日常的に幼稚園教育の状況が理解されるよう努め、開かれた園であるとともに教員と保護者の信頼関係を築く。また、保護者が気軽に相談できる体制をつくること、家庭教育の在り方について積極的に話し合いがなされていることが大切である。

カウンセリングに関する専門的な知識を育成すること

ケースによっては幼稚園のかかわりだけでなく、医療機関、相談機関と連携を図るなど専門のカウンセラーによるカウンセリング、心理学や教育学等の専門家による子育て相談などの支援体制を確立しておくことが必要である。

(8) 家庭・地域社会との連携

開かれた園づくりは幼稚園教育の重要な課題である。

幼児の健全な育成を図るために、幼児の園外の活動への参加を促すとともに、家庭・地域社会の教育機能の高まりを促し、豊かな教育環境づくりに努めるなど、家庭・地域社会との連携を図ることが大切である。

幼児を理解し、指導するには、その家庭をよく理解する必要があり、園の教育活動の充実を図るためにも、保護者への啓発や理解・協力は欠かせない。

平素から、園通信や学級通信の発行や電話連絡等で、保護者との好ましい人間関係を築き、積極的に家庭との連携を図るようにする。

また、教員自身が地域の活動に積極的に参加することによって、保護者や地域社会との交流を深めることは、家庭や地域の実態を把握し、一人一人の幼児の理解を深めることにつながるものであり、保育指導の充実を図る上で極めて重要である。

家庭との連携

教育活動の一層の充実を図るためには、一人一人の幼児に対する正しい理解を深めるとともに、教育に対する保護者の関心や理解を深め、教員と保護者との相互理解を図ることが大切である。そのためには、幼稚園と家庭との密接な連携が必要である。

家庭訪問

幼児を理解する上で家庭を知ることは、大切なことである。家庭は、いつ

の時代でも人間形成にとって最も基本的な役割を果たす場であるといえる。そのため、幼児の生活の基盤である家庭を訪問することは、教育的意義が大きい。幼児の家庭及びその地域の実情を教育的にとらえ、幼児のおかれている状況を正しく理解するとともに、保護者との親密感や相互理解を深め、幼児の教育という共通の課題について理解と協力が得られるように努めることが大切である。

家庭訪問には、一斉に実施する定期訪問と、日常の教育活動の一環として必要に応じて行う臨時訪問とがある。通常、年度当初に実施されている定期訪問では、保護者と初対面になる場合が多いので信頼関係を築く第一歩としたい。保護者と接する中で得られた担任への信頼感は、その後の幼児の指導に、重要な要素となるものである。

家庭訪問の留意事項として次のようなことがあげられる。

訪問は相手の立場になって考え、訪問目的、内容、予定日などを事前に連絡し、決めた日時は必ず守る。

事前の準備として、幼児の個性や実態を日常観察によって記録しておく、話し合う内容を考えておく。また年長児の場合は指導要録の記録や前担任との連絡なども参考にしておいておく。

家庭訪問にふさわしい服装で訪問するとともに、時間があまり長くないようにし、要領よく話題を展開していく。また、特別な接待などは受けない。

保育参観や幼稚園が計画した会合などに参加しにくい家庭や課題の見られる幼児のいる家庭には、より細かい配慮をもって訪問し、保護者の願いをしっかりと受け止め、共に考える態度で接する。

保護者の前で話しながら指導簿を広げたり、書いたりすることは避けるなどの配慮が必要である。

謙虚な態度で接するとともに、専門用語の多用を避けるなど言葉遣いには留意し、誤解や不信感を招くことのないようにする。また自分で答えにくい場合などは、即答せず園に帰って相談し答える。

他の家庭、教職員や他の幼児のことを批判しない。

幼児の保育について、家庭教育の立場から、家庭でやるべきことなどをはっきりと知らせ、家庭教育の意義を十分理解してもらうよう努める。

幼稚園や家庭生活の中から、長所となる事柄を取り上げるなど、幼稚園生活に励みを与えるように努める。

指導にかかわることは、自信をもって話し、保護者から信頼を得る機会とする。また、幼稚園生活上の問題点や要望に対しては、謙虚に受け止め、適切な応答をする。

訪問後、具体的事実、指導事項、幼稚園全体にかかわる事柄、学年や学級に共通する問題点、要望などを整理して園長に報告するとともに、関係職員に伝える。

学級懇談会・保育 参観

学級懇談会は、保護者が来園し、担任と学級の保護者全員を対象として行うものである。担任又は学級役員が主体となることが多いが、教員側の一方的な説明に終わることのないよう留意することが大切である。

保護者全体との懇談であっても、ともすれば、保護者の関心が自分の子どもに集中しやすい。懇談の目的や開催時期によって内容の取り上げ方は違うが、例えば、幼児の遊び、幼児期の生活習慣、休業日の生活など共通する話題を中心にするのがよい。個人的な話題は、個人懇談会等のときにする。

懇談会を進めるに当たっては、保護者の望む内容をアンケートなどであらかじめ把握しておくこともよい方法であり、必要に応じて適切な資料を用意するとよい。また、参加者が気楽に話し合えるような和やかな雰囲気づくりを工夫することが大切である。

保育参観については、幼稚園での一人一人の幼児の姿を多面的に見ることができ、保護者の関心度は極めて高い。保育参観の教育的意義をしっかりとらえ、次にあげることを配慮し、計画的に行う。

他の幼児と比較する見方をしない。幼児の発達は、極めて差が大きく、一人一人の発達の特徴が異なることの理解を促す。

教育要領のねらいと内容、幼稚園教育の目指す幼児像など、正しく理解できるよう、機会あるごとに保護者に話す。

参観のしおりなどを手渡し、保育の見方や参観の在り方を伝える。また、参観後、意見などが自由に幼稚園に寄せられるよう配慮する。

幼稚園すべての環境を日常的に整え、保護者が幼児の保育内容や生活状況を観察しやすいように整備・工夫する。また、十分な保育研究をしておくことも大切である。

通信

園通信は、幼稚園からの諸連絡のほか、行事や幼児の日々の活動や成長の姿を情報として家庭に知らせることによって、より密接な家庭との連携を図ろうとするものである。したがって、園通信を発行する場合には、次の点について配慮することが必要である。

園経営の計画に基づき継続性をもたせる。

内容が正確で、考え方が偏らない。

情報を受ける側の立場に立って内容を構成する。

必要性、適時性、他の通知文との整合性などを考慮する。

具体的で平易な文章にする。

印刷不良や誤字、脱字のないようにする。

幼児のつぶやきや、保護者の声を載せる場合、特定の幼児や人に偏らないように気を付ける。また、プライバシーの保護にも配慮する。

園通信は公的な性格をもつため、引用文などの場合は出典を明記する。

なお、学級通信などのように担任が編集するものであっても、公的な文書の性格をもつものであり、必ず事前に園長や教頭に目を通してもらい、十分

に連絡・調整を行い、了承を得てから印刷・配布する。

P T A

P T Aとは、「児童生徒の健全な成長を図ることを目的とし、親と教師とが協力して、学校及び家庭における教育に関し、理解を深め、その教育の振興に努め、さらに、児童生徒の校外における生徒の指導、地域における教育環境の改善、充実を図るため会員相互の学習その他必要な活動を行う団体である。」(文部省社会教育審議会報告(抜粋)・昭和42年6月)とあり、幼稚園においては幼児の健全な成長を図るために保護者と教職員が協力し合う社会教育関係団体である。

P T Aの運営や活動が形式化しないためには、保護者と教員が同じ会員として、相互に尊重し合い、互いの意見が反映されるようにすることが必要である。

教員はこの組織や活動を生かし、幼稚園とP T Aとが密接に連携して幼児の生活を豊かにするとともに、運営に当たっては、すべての幼児の健やかな成長を考えていくという広い視野に立って運営されるよう協力したいものである。

4 保育

(1) 幼稚園教育の基本的な考え方

幼稚園教育は環境を通して行うことが基本であり、幼児の生活を大切にしてい教育を行うことである。

幼児は「児童憲章」や「児童の権利に関する条約」において、人権の尊重とともに、自身が権利の主体者として尊重されるべきものであるとされている。幼稚園教育はこの基本的な認識の上に立ち、次の点を特に重視して展開することが必要である。

幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。

遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること。

一人一人の特性に応じた指導を行うようにすること。

ア 幼児期にふさわしい生活の展開

教師との信頼関係に支えられた生活

周囲の大人から自分の存在が認められ、受け入れられているという安心感を基盤にして自分の世界を広げ、自己の力を発揮しながら自立した生活が展開できるようにする。

興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活

自分の興味や関心に基づいた直接的・具体的な体験を通して、発達に必要な様々な活動を展開できるようにし、充実感や満足感が味わえるようにする。

友達と十分にかかわって展開する生活

友達と相互にかかわることを通して自己の存在感や他者への思いやり、集団への参加意識を高め、自律性を身に付け、社会性が発達するように、様々なものに対する興味・関心・意欲を高め広げられるようにする。

イ 遊びを通しての総合的な指導

幼児期の遊び

幼児の生活の中心は、遊びであり、自発的活動としての遊びは幼児期の重要な学習である。幼児が自分から興味や関心をもって環境に主体的、意欲的にかかわり、心や体を働かせて活動をつくり出し、展開する動きの全体を指している。

幼児期の遊びの特性

幼児期は、知識や技能を習熟するために遊ぶのではなく、遊びを楽しむ中でそれらを身に付けていくものであり、考えたり、試したりの行動も同様である。また、友達を求めるために遊ぶのではなく遊びを展開する中で共通の目的をもったり、楽しさを共感したりすることによって友達とのかかわりをもつものである。活動の目的においても、最初から目的をもってかかわろうとする活動もあれば、活動を進めながら目的をはっきりさせたり、変更させながら取り組んだりすることも多くある。遊びを通して様々なことに気付き、人とのかかわりを体験し、生活行動の仕方などを身に付けていくのである。

さらに、その中で、葛藤や挫折感、達成感などを味わい、あるときは一人で、またあるときは、教師や友達に支えられて、自らの課題を乗り越えるという体験を積み重ねていく。すなわち、幼児が自ら取り組み、進めていく遊びには、運動能力、思考力、表現力、感性、創造性、人への信頼感や心のバランスをとる力などを養うための内容が含まれている。しかし、幼児が自発的に遊びを展開していればそれが必ず身に付くというのではなく、教師の適切な援助があってこそ望ましい発達が促されていくのである。

総合的な指導

幼児の遊びは、心身全体を働かせるものであり、幼児は遊びを通して様々な機能の発達に必要な経験を相互関連的に積み重ねていくものである。つまり、幼児の諸機能は遊びを通して総合的に発達していくのである。

具体的な場面では、遊びの中で幼児が発達していく姿を様々な側面から総合的にとらえ、発達に必要な経験が得られるような状況をつくることが大切である。

幼児が遊びを展開するとき、教師は、ともすれば幼児の活動を見守るだけの姿勢をとったり、教師の思いを先行させる活動を進めたりすることなく、幼児の自発性を尊重しながら、一人一人の発達や行動、考え方などを理解し、それぞれの特性や発達課題に即応した指導に努めなければならない。

つまり、教師は、幼児一人一人の育ちの方向を見据え、自発的な活動を通してその幼児が発達する姿を様々な側面からとらえ、遊びを広げたり深めたりできるような環境を準備し、必要に応じて再構成をすることが大切である。

また、幼稚園は同年代の幼児が集団で生活することを通して教育を行う場である。そのため、指導に当たっては、幼児が生活を通してともに過ごす楽しさを味わい、互いに影響し合い、高め合い、支え合える集団となるように配慮する。特に遊びの中では、集団を構成するメンバーの一人一人がその集団において生かされているかどうか、遊びの目的や方向性を常に把握し、個々の思いや願いが存分に出せるように援助することが大切である。幼児同士のぶつかり合いによってトラブルが生じたときは、幼児が自分の思いを自分なりの言葉で表現したり、相手の思いを受け止めたりできるように導いていく必要がある。ただ、幼児間で解決が図られる場合については見守りながら任せることも大切である。

集団のもつ教育力を十分生かしながら、遊びを通して体験を積み重ねていく幼児の姿を大切に受け止め、主体性を大切にしてその姿に応じた柔軟な援助を行うなど一人一人の発達が促されるように適切な指導を行い、幼稚園教育のねらいが総合的に達成できるように努める。

一人一人の発達の特性に応じた指導

幼児一人一人の発達の特性に応じた指導を行うようにする。教師は、幼児が自ら主体的に環境とかかわり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達ととらえ、幼児一人一人の発達の特性を理解し、その特性やその幼児が抱えている発達の課題に応じ、その幼児らしさを損なわないように指導するこ

とが大切である。ここでいう「発達の課題」とは、その時期の多くの幼児が示す発達の姿に合わせて設定されている課題ではなく、幼児一人一人の発達の姿を見つめることによって見いだされるものである。

一人一人に応じる
ことの意味

一人一人に応じることは、ただ単にそれぞれの要求にこたえればよいというわけではない。幼稚園教育の目指すものを踏まえ、一人一人が過ごしてきた生活を受容し、これに応じることである。しかし、一人一人に応じることは、いつも活動形態を個々ばらばらにするというのではなく、互いに影響し合って発達していく集団の教育力を生かした指導が大切である。

一人一人に応じる
ための教師の基本
姿勢

一人一人に応じるための教師の基本姿勢としては、幼児の行動に温かい関心を寄せたり、心の動きに応答したり、共に考えるなど共感的な態度が重要である。このような基本姿勢を身に付けるためには、実際に行った幼児とのかかわりを振り返り、自分自身の在り方やかかわり方に気付き、幼児一人一人に応じたより適切なかかわりができるように努めなければならない。そのためにも、教師は自分の心の状態を認識し、安定した状態でいられるように努めることが大切である。

(2) 教師の役割

環境を通して行う教育において、教師は様々な役割を担っている。

幼児にとって人的環境が果たす役割は極めて大きい。幼稚園の中の人的環境は、担任の教師だけでなく、幼児の周りの教師や友達すべてが環境となる。集団生活の中で、幼児一人一人が主体的に活動に取り組むことができる指導を幼稚園全体の教師の協力の下に行っていくことが必要である。

幼児の主体的な活動と教師の役割

幼児の主体的活動としての遊びを中心とした教育の実践を進めるには、教師が遊びにどうかかわるのかという教師の役割を理解することが必要である。教師の役割としては、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児を理解する者、共同作業を行う者として教師自身の存在を含めて幼児と適切なかかわりをする役割がある。

集団生活と教師の役割

幼児の主体的な活動は、友達とのかかわりを通してより充実し、豊かなものになる。一人一人の思いや活動をつなぐ環境構成、集団の中で個人よさが生かされるように幼児同士がかかわりのもてる環境構成が必要である。

幼児期は自我が芽生える時期であり、友達との間で対立や葛藤が起こりやすく、様々な経験を通して自己主張や感情の抑制、思いやりなどの気持ちを学んでいく。この時、教師は幼児一人一人の発達に応じて、相手の気持ちやとるべき行動、集団生活のルールなどを体験を通して考える機会を与え、よいことや悪いこと、人としてやってはいけないことを理解させることが重要である。

また、時期に応じて、様々な友達とかかわり合う環境を構成し、相互に認め合い仲間意識を培う体験をさせることが大切である。その中で協力し合うことの楽しさや責任感、達成感を感じ、自己主張や周囲との協調を学ぶ中で集団への帰属感を培うことができる。

しかし、幼児は集団の中で活動していればよいというのではなく、教師が集団の中での幼児の心の動きを理解し、幼児期の特性を踏まえ、一人一人が目的をもって充実した主体的な活動ができるように環境を再構成し、援助していくことが必要である。

教師間の協力体制

幼児の興味や関心は多様であるため、並行して様々な活動を同時に見る必要がある。そのためには日頃から教師が連絡を密にして、幼稚園全体として環境を構成し、援助していくことが大切である。教師たちが相互に様々な幼児にかかわり、互いの見方を話し合うことで幼児理解を深めることができる。

園内研修において、日々の保育実践の記録を基に振り返り、今後の在り方を話し合う中で共通理解と協力体制を築き、教師一人一人のよさを認め合い専門性を高めていくことが大切である。教師同士が各々の違いを尊重しながら協力し合える開かれた関係をつくり、幼稚園教育を充実することが望まれる。

(3) 各領域の指導に当たって

教育要領による各領域のねらい・内容の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

ア 「健康」

心と体の健康は、幼児が自己の存在感や充実感を味わうことを基盤として、しなやかな心の働きや体の動きの発達を促すことが大切である。しなやかな心と体を育てることは、困難な状況において、その幼児なりにやってみようとする気持ちをもつことにつながる。

様々な遊びの中で、幼児が全身を使って活動することにより、安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすることが大切である。そのためには、安定した情緒の下で興味や関心に応じた遊びを展開し、安全に気付くような適切な働きかけを行うと同時に、自分の体だけでなく友達の体も大切にしようとする気持ちをもたせるようにしたい。

自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されるように、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫することが大切である。具体的には、第一に「幼児の遊びのイメージや関心の広がりに応じて行動範囲が広がること」、第二に「園庭全体の空間や遊具の配置を幼児の自然な活動の流れに合わせること」、第三に「幼児が安定して自分たちの活動を展開できるように園庭の使い方や遊具の配置等を見直すこと」である。

幼児の自立心を育て、幼児が主体的な活動を展開する中で、基本的な生活習慣を身に付けるようにすることが大切である。そのために、幼児が自分でやり遂げたという満足感を味わわせ、生活に必要な習慣を身に付けることの大切さに気付かせ、自律心を育てることが必要である。こうしたことが、社会生活上のルールを守ろうとする道徳性の芽生えの育成につながっていく。

イ 「人間関係」

教師は幼児との信頼関係を基盤にしなが、周囲の働き掛けにより様々な感情を体験したり、試行錯誤しながら自分の力で行う充実感を味わったりできる適切な援助を行うことが大切である。そのため、教師は、幼児の行動に温かい関心を寄せ、心の動きに応答し、幼児と共に考える姿勢を大切にしたい。

幼児が自己を発揮し主体的に活動するには、自己の存在感を実感し、互いに必要な存在であることを認識できるような教師と幼児、幼児同士の心のつながりのある温かい集団を育てなければならない。

道徳性の芽生えを培うに当たって、基本的な生活習慣を形成するとともに、他者とのかかわりにおける葛藤やつまずきの経験を通し、自他の気持ちや欲求は異なることに気付かせ、他者への思いやりや善悪のとらえ方を発達させることが大切である。ときには、善悪を直接的に示し、集団のルールに従うよう促すことも必要である。

自分と関係の深い人々とふれ合う中で、様々な人への積極的な関心や共感、思いやりなどをもって、他の人々と共に生活する楽しさや大切さを知り、それに必要な習慣、態度を身に付けることができるようにすることが重要である。また、他の人の役に立っているという満足感を得られるような活動や人に対する優しさや愛情あるかかわりを味わわせる生活を送らせるようにすることも大切である。

ウ 「環境」

幼児が、遊びの中で周囲の世界に好奇心を抱き、自分なりに考えることができる過程を大切にしなければならない。そのためには、幼児が、周りの環境の中にあるものの特性を生かし、興味や関心を引き出せるような場を設定していくことが大切である。

幼児が、変容しつつも変わらずに存在する自然に出会い、触れる体験を通して、心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等の基礎が培われるようにすることが大切である。そのために、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫しなければならない。

身近な事象や動植物に対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすることが重要である。また、このような様々な気持ちを引き起こすような豊かな環境の構成と身近な事象や動植物とのかかわりが深められるような指導を考えることが大切である。

日常生活の中で、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすることが大切である。幼児期に大切なことは、数量や文字の習熟の指導を行うことではなく、幼児自身が興味や関心を十分に広げ、数量や文字にかかわる感覚を豊かにできるようにすることである。このような感覚が、小学校における数量や文字の学習にとって生きた基盤となるものである。

イ 「言葉」

幼児の認識や思考は、言葉を使うことで確かなものになっていく。したがって、幼稚園においては、生活の中で心を動かし表現したくなるような体験を豊富にもち、言葉を使って表現する意欲や態度を育てることが大切である。

そのためには、言葉を交わす喜びを味わえるような友達や教師の存在があること、話したり聞いたりする経験を十分もつこと、幼児が心を開き、安心して話ができるように援助することが必要である。

絵本、物語などに親しむことは、豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚を培う上で必要なことである。そのために、絵本や物語を読み聞かせ、自分の経験と結び付けさせたり、想像を巡らせ十分楽しさを味わわせることができるよう幼児の理解力や多様な興味・関心に応じることが大切である。また、心の交流を図ることができ、絵本や物語の世界に浸り込める雰囲気作りに留意したい。

文字については、直接指導するのではなく、文字を何らかの意味を伝えるものと意識させ、遊びの中で伝える喜びや楽しさを味わわせるようにすることが大切である。また、日常生活における文字に対する興味や関心、出会いを大切に、小学校以降において文字に関する系統的な指導が適切に行われることを保護者や小学校関係者に理解されるよう働きかけなければならない。

オ 「表現」

幼児は身近な環境とかかわりながら、不思議さやおもしろさなどを見つけ美しさや優しさなどを感じ、心を動かす。そうした感動を他の幼児や教員と共有し、表現し合うことを通じて豊かな感性を育てることが大切である。そのためには、自然などの身近な環境に十分かかわったり、幼児が「楽しい」「面白い」と感じ、主体的にかかわれるような環境構成が必要である。

幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はその表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を大切にし、様々な表現を楽しむことができるようにすることが重要である。したがって特定の表現のための技能を身に付けるための偏った指導が行われないよう配慮したい。

生活経験や発達に応じ、表現を楽しみ、表現する意欲を十分発揮することができるような遊具や用具を整え、自己表現を楽しめるよう工夫す

ることが大切である。

(4) 指導計画

幼稚園教育は、幼児が自ら意欲をもって環境とかかわることによって作り出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。このことを踏まえ、幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成する必要がある。この計画は、幼児の活動に沿った柔軟な計画であり、幼児一人一人の幼稚園生活に見通しをもった計画である。

幼児を中心にした指導計画を作成するためには、「指導」とは幼児が発達に必要な経験を得られるように適切な援助を行うことであるということをしつかり念頭におきたい。また指導計画は、一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開して必要な経験を得ていくように作成していくことが大切である。指導に当たっては、あらかじめ設定したねらいや内容を修正したり、それに向けて環境を再構成したり、必要な援助をしたりすることなどの指導を適切に行っていく必要がある。

指導計画は、年、期、月などの比較的長期間を見通した計画（長期の指導計画）と、週や一日など比較的短期間の幼児の実際の生活の展開に即した計画（短期の指導計画）の二つに大別することができる。

ア 長期の指導計画

長期の指導計画は、以下のことを踏まえ作成する。

幼児の生活する姿を把握する。

心や体の発達の状況、生活の中での自立の構え、教師や友達とのかかわり方、幼児を取り巻く環境へのかかわり方、ものの見方、感じ方、とらえ方、言葉の発達の状況、表現への意欲など、累積された記録や資料を基に幼児の実態を把握する。

具体的なねらいを設定する。

教育課程によって教育の方向を見通しながら、幼児の生活を大筋で予測し、その時期に育てたい心情・意欲・態度などを明確にする。

具体的な内容を設定する。

幼児の実態を把握しながら、それぞれの発達の時期のねらいが達成されるために経験する必要がある内容を設定していく。この「経験」とは活動そのものではなく、活動の中で幼児の発達に必要な様々な体験としてとらえられることが大切であり、それらを援助していくように計画を立てる。

環境構成を考える。

環境構成の視点として、次のようなことがあげられる。

幼児の発達の過程を踏まえる。

幼児の生活の流れを見通す。

幼児の興味や欲求を受け止めて環境を構成する。

その時期の自然や社会の事象の特徴を生かす。

生活の中の出来事や文化などに出会えるようにする。

イ 短期の指導計画

短期の指導計画では、長期の指導計画の基本的な考え方を基にして、週や一日の計画を作成する。「今週は何をするか」「明日、何をするか」でなく、「幼児はどのように成長してきているか」「幼児の欲求、興味は何か」など、幼児一人一人の理解を深めていくことを大切に作成する。

週・日などの生活の区切りを単位とした指導案

週案・日案は毎日の生活に応じた最も具体的な計画であり、学級の実情や一人一人の幼児の生活する姿をとらえながら、どのように保育を展開すればよいかについて具体的に予想を立てるものである。

指導案作成の留意点

幼稚園教育は環境を通して行うことが基本であり、その環境をつくり出すのは教師である。どのような環境を作りだし、どのような援助を行うかを具体的に示したものが指導案である。指導案の作成は教師の仕事の中で重要なものの一つである。

幼児の実態を的確にとらえる。

一人一人の発達の実情や毎日の生活の特徴など幼児との生活の中で、理解をするように心がけておく。

具体的な「ねらい」と「内容」をはっきりさせる。

幼児が生活を通して発達していく姿を踏まえ、幼稚園教育全体を通して幼児に育つことが期待される心情、意欲、態度などを「ねらい」とし、それを達成するために教師が指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものを「内容」とする。その幼稚園生活の流れや遊びの展開などの実態を把握し、ねらいに沿って経験してほしいこと、身に付けることが必要なことなど、教師の願いを盛り込む。

環境の構成をする。

具体的なねらいを達成していくために幼児がどのような経験をする必要があるかを、幼児の生活する姿に即してとらえることが大切である。そのような経験が得られるような状況を、遊具や用具などの物、他の幼児や教師などの人、身の回りに起こる事象、時間、空間などを関係付けて作り出していくことが環境を構成していくことである。

教師が物や場をどのように用意するかだけでなく、幼児が気付いたり興味をもったりしていることを大切に取り上げて、それをどのように幼児の生活の中に組み込んでいくかを考えることが特に重要になる。環境の構成の中で教師は、重要な役割を果たしているのである。

環境にかかわって活動する幼児の姿と教師の援助の予想をする。

環境にかかわって展開する幼児の生活をあらかじめ予想してみる。幼児と生活を共にしながら、生活の流れや状況の姿に応じて、環境の再構成などの適切な援助を行う。

実践し評価する。

活動の展開は次のような過程で行う。

具体的なねらいや内容に基づいて環境を構成する。

幼児が自ら環境にかかわる活動を展開する。

一人一人の幼児が望ましい方向に向かって活動を展開していけるように教師が適切な援助を行う。

この活動展開を通して幼児の姿をとらえ直すとともに、指導の評価を行い、次の計画作成につなぐ。

反省・評価

一人一人の幼児の変容や行動面の裏にある心の動きを把握し、環境の在り方や援助の仕方から環境構成や教師の援助が適切であったかどうかを反省・評価することが大切である。また、それらを記録し残しておくことは、ねらいや内容と幼児の発達の状況とのずれに気付いたり、幼児の主体性を発揮させながら望ましい方向に向かって計画性のある指導を行うために重要である。

指導案の形式

指導案には、週案と日案がある。指導案の形式は一定していないが、例示すれば次のようになる。

(例)

期のねらい		
幼児の姿から	ねらい	
	内容	
環境を構成するポイント	予想される幼児の活動	指導・援助
記録・反省		

(5) 環境構成の在り方

幼稚園教育の基本は「環境を通して行う」教育であると幼稚園教育要領に明示され、幼稚園の役割は、発達を促すために「発達に応じた環境からの刺激」が重要な要素として掲げられている。このように心身の発達が著しく、環境からの刺激を大きく受ける幼児期にあっては、どのような環境の下で生活し、環境とどのようにかかわったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつことになる。

幼児が主体性を発揮しながら、具体的なねらいに向かって必要な体験を重ねていくための環境とは、遊具や用具・素材などの物の構成のみを指すものではなく、物や人、自然や社会の事象、時間や空間あるいはそれらがかもし

出す雰囲気など様々な要素が含まれるものである。

環境を構成していくための視点として、次の3点をあげることができる。

発達の時期に即した環境(発達の視点をもつこと)

興味や欲求に応じた環境(幼児を取り巻く環境に新鮮な目をもつこと)

生活の流れに応じた環境(家庭・園生活には連続性や関連性があること)

これらのことを踏まえ、幼児が生活する姿を中心に据えて、それぞれの視点相互の関連を図りながら、幼児自身が楽しいと感じるような魅力ある環境を構成することが大切である。そのように配慮された環境は、幼児の発達を促すためにふさわしい教育環境になるものである。

また、幼児の行動や心情に大きな影響を及ぼす存在である教師は、幼児と生活を共にしながら信頼関係を十分に築きつつ、幼児の心にふれ、幼児の生活する姿をとらえて、よりよい教育環境を創造することが大切である。

(6) 道徳性の芽生えを 培う指導

幼稚園教育の目標(2)において、「人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。」(幼稚園教育要領第1章総則)と示している。すなわち、幼児が生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期であることを踏まえ、園生活における具体的、自主的な活動を通して次の3点に留意し指導する。

基本的な生活習慣の形成を図る。

他の幼児とのかかわりの中で、他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにする。

自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにする。

特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきなどを体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮することが大切である。

道徳性の芽生え

就園する頃になると、幼児の心身の成長は著しくなる。そして、2～3年間で驚くほどの「興味・関心」が広がり、「自分でものごとをやっていく力」が育っていく。この過程で受ける様々な刺激や、教師・保護者などの強い影響力と幼児自ら育ちゆく「自我」などが相互にかかわって、人として、「してはいけないこと」「言うてはいけないこと」「何がよくて何が悪いか。」などの区別が自然と身に付き、人間としての好ましい考え方や行為が徐々に形づくられていく。

人とのかかわりをもつ力の育成

幼児は、安定した人間関係を確立していく中で、自己の存在感、他者との共感や思いやり、集団への参加意識をもつようになる。また、幼児が相互に交わり合い、理解し合い、支え合うなどの体験があいまって、将来、社会を構成する一員として必要な主体性と社会的態度を身に付けていく。さらにこ

うした感情や意識に支えられる安定した情緒は、自ら周囲に働きかける力を生み出す基礎となるものである。

多数の幼児が一緒に生活し、しかもどの幼児にとっても快適な園生活であるためには、生活上のルールが必要になってくる。多数の幼児に限られた数の遊具を使う場合には、幼児が自分たちなりに了解し合える遊び方が生まれてくる。使いたい者が一時に多数集まれば自然に話し合って調整し、順番などを考えたりすることもできる。教師は自然に生まれてくるルールを大切にしながら、幼児の発達に応じて、幼児に理解できる範囲で考えさせていくことが大切である。

幼児のつくり出すルールは、教師から見ると矛盾していたり、ときには不都合だったりすることもある。また、ルール違反に対する判断があいまいであったり、厳しかったりすることがあるが、それは、その時期やそのときの遊びの状況や人間関係の影響を大きく受けるからである。生活全体の中で十分に友達とふれ合い、豊かな感情体験が得られるようにするとともに、自分の感情や意志を豊かに表現したり、自分とは違った様々な幼児の存在に関心をもち、共に楽しみ、共感し合えるようにしなければならない。

自然とのふれ合い
や身近な環境との
かかわり合い

意欲、豊かな感情、物事に対する興味や関心、思考力、表現力、運動の能力等の基礎は、自然とのふれ合いや身近な環境とのかかわり合いの中で様々な具体的体験を通して身に付けるものである。

特に生き物や自然の素材と十分にかかわり合い、知的好奇心や探索欲求を満足させ、更に自分でいろいろと工夫して取り扱ってみる中で、幼児は自然の偉大さに気付き、偶然に起きる様々な出来事によって感動体験を数多く味わうことができる。また、生き物をかわいがったり、死に出会ったりして、生命の大切さを身をもって感じ、生き物に深い愛情をもつことができるのである。

基本的な生活習慣
の形成

幼児が生活に必要な習慣を身に付けることは、その生活を健康で豊かなものにするために大切なことである。

人間の生活の仕方、物事の善悪に対する感覚や基本的な生活習慣を形成する第一歩は、家庭において行われるものである。幼児は、家庭において獲得した生活上の習慣を、幼稚園において教師や友達と一緒に生活する中で、これらを再構成し、自らの生活習慣として身に付けていくものである。

例えば、幼稚園に入園したばかりの幼児は、新しい経験をするとともに、食事の仕方、便所の使い方も家庭とは異なるなど、生活に大きな変化があり、戸惑いも多い。この新しい環境の中で、幼児は今までに身に付けてきた生活の知恵を十分生かし、幼稚園の生活に慣れようとする。そして、次第に幼稚園生活を楽しみ、自信をもって生活することができるようになるのである。

このように自発的な活動を通して、いろいろなことに幼児自らが関心をもち、最後までやり遂げようとする意欲が見られるようになる。さらに友達と

共感したり、協力したり、また、主張のぶつかり合いや葛藤の中で、自分を表現したり、自分を抑えたりできるようになることによって初めて基本的な生活習慣を身に付けていく。

教師は、幼児なりのやり方を大切にして、幼児の様子を注意深く見守りながら、機会をとらえて一人一人に応じた援助をしていくことが大切である。指導に当たっては、幼児の行動をいたずらに規制したり、叱責したりするのではなく、一人一人の行動や心情を適切に受け止めることが必要であり、また、やり遂げた喜びや満足感、心地よさなどが味わえるように援助し、幼児が自信をもって自分なりに生活できるようにすることが大切である。

(7) 保育の実際

幼稚園生活は、何かを一斉にやらせることから始めるのではなく、一人一人の幼児が自然な生活の流れのなかで、安心して直接的、具体的な体験をしていくことを大切にしなければならない。

ア 保育の視点

個を育てる

幼児にとっては、信頼し、頼り切れる援助者が必要となる。幼児はその援助者である教師との信頼関係を基盤にして、あるがままの自己を表出しながら次第に周囲の環境に働きかけていく力を身に付けていくことができる。生育歴・家庭環境・地域の環境の異なりとともに、行動・態度・理解・経験などを含めた発達段階や個性の異なる幼児一人一人の実態を把握し、発達課題を明確にしながら、それぞれの幼児の興味や関心に即した活動への援助に心がけ、確かな発達に努めることが大切である。

集団を育てる

教師との信頼関係を基盤にして園生活に安定感をもった幼児たちは、やがて、周囲の物や人に働きかけようとする。ときには摩擦を生じながらも適切な援助を受けることによって、活動や人間関係に広がりや深まりを見せ始め、学級の一員としての自覚も生まれてくる。

そこで教師は、個々の幼児の思いや願いを受け止めながら、よりよき共感者となることが重要である。一人一人をかけがえのない存在としてとらえる姿勢によって、幼児は互いを大切にし、協力し合う姿勢を身に付けた温かい集団が育つようになる。指導の中では幼児たちの自発的な活動を大切にするとともに、その中でも共通体験させたいものや、発達に沿って経験させたい活動を園や学級の目標に照らし合わせて計画的に進めることが必要である。

教育環境を整える

常に幼児が存在感を実感し、温かさや和やかさとともに、活動したいという意欲がわくような教育環境の整備に努めることが大切である。

使いたいと思う材料や用具を自らの手で準備したり、片付けたりできる環境であること。

すべてにわたり整備されたものではなく、工夫したり、見つけ出したりできる余地のある環境であること。

掲示板や壁面は、常時掲示する物、季節や活動に応じて掲示する物などに分けながら効果的に利用すること。また、幼児たちが、積極的に参加できる場所があること。

保育室環境として必要な物の精選に努めるとともに、幼児一人一人が個性を発揮しながら園・学級の教育目標に向かい、個と集団が十分活動できる態勢をつくること。

イ 保育方法の多様化 と個を生かす保育 方法

幼稚園の生活は、幼児が自分から周囲の環境に働きかけて、様々に遊ぶことを中心に展開する。幼稚園の生活のつくり手、担い手は幼児自身である。生活の主体が幼児自身であることから、保育の方法は、教師の一方的な考え方で決めるものではなく、幼児が自ら営む生活の中に自然に作り出されてくるものであると考えることが必要である。

幼稚園教育要領では、「幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであるが、いずれの場合にも、幼稚園全体の教師による協力体制を作りながら、一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行うようにすること」と示している。

このことは、幼児が活動している場合において様々な保育方法が見られるが、いずれの場合においても、幼児が自ら主体的に遊ぶ姿が重視されなければならないことを示している。教師が幼児の欲求や興味、目的意識などを洞察し、それに合った自然な活動の方法を、幼児と共に作り出していくことが重要なポイントになる。また、幼児が自らを高めていくことができるような遊びを展開するためには、教師の適切な援助が大切である。

個々に取り組む保 育方法

幼児は、身近な事象に興味や関心がもてると、それに働きかけたり、それを取り入れたりして自分の考えやイメージを表現しようとする。こんな物をつくりたいとか、こんなことができるようになりたいなどの内発的な動機に支えられて、自分なりの目的を達成しようとするのである。このような欲求の強いときには、個々の幼児がじっくりとその活動に取り組み、試したり、考えたりしながら達成する喜びを十分に味わえるようにすることが大切である。そのためには、場や時間が十分与えられなければならない。個々に取り組む活動の方法は、個性や個の特質が最大限に生かされるために、その幼児なりの成長発達を促すことができ、個を生かす保育方法でもある。

グループで取り組 む保育方法

幼稚園教育は、集団による教育であり、幼児にとって友達の存在はたいへん重要な意味をもっている。家庭で大切に扱われ、自分の思うままに生活していた者同士が出会い、様々なかかわり合いを体験しながら一緒に遊ぶ楽しさを味わうという、このような過程で得られる育ちは、人間としての人格形成の基礎となる。また、幼児期は、自分以外の友達の存在に目が向き、自分から積極的にかかわりを求めていく時期でもある。幼児は、幼稚園の生活に安心感がもてるようになると、同じような興味をもった幼児と同じ場で遊び

ながら、自然なかかわりをもつようになる。幼児同士の様々なかかわりによって、幼児の自立を促し、自分と他の人との区別、他の人への思いやり、協力や協調の態度、連帯感などが育つものである。

学級全体で取り組む保育方法

学級全体で取り組むとは、一般に学級の幼児全員が、同じ時間に同じ場所に集まって活動する保育方法をいう。学級のおおぜいの友達と一緒に鬼遊びをしたり、声をそろえて歌ったり、リズム遊びをしたりするなどの経験により、幼児は自分が学級の一員であることを感じ取り、友達への関心を広げていくことができるようになる。特に年長組になると、自分たちの生活の場である保育室をみんなで整えようという気持ちや、自分の気持ちを話したり、友達の話をしっかり聞く態度を育てたり、力を合わせて学級の目標に向かってがんばろうとする気持ちももてるなど、自分の学級への愛着が生まれる。それがさらに広がり、自分の幼稚園への愛着や誇りにもつながるものである。学級全体で取り組む保育が、教員の一方的な選択とリードによるものにならないようにするためには、幼児の発達を把握し、興味を的確にとらえ、一日の生活の中での幼児の自発性を尊重することに留意する必要がある。

ティーム保育

実りある保育をするためには、個人の活動、グループでの活動、学級全体での活動など多様な形態や、自然体験や社会体験のための園外保育など多様な保育実践が必要である。このような中では、多くの幼児が散開したり、同時に流動性をもって行う遊びなどの諸活動を一人の教師がすべて掌握することは難しい。また、幼児はかかわる相手によって様々な側面を見せることから、多数の教師のかかわりによって一人一人のよさや可能性を広げることでも大切である。こうしたことから、学級を基本としながらも、その枠を超えた柔軟な指導方法として、複数の教師が協同して保育に当たるティーム保育によって、きめ細かい指導の工夫を図ることが求められている。

その際、教師間の関係を主と従という固定的な関係とするのではなく、それぞれの教師の特性や得意を生かし、流動的かつ柔軟性のある協働体制を園全体で考えていくことが大切である。またティーム保育に当たっては、日常の保育での情報を交換し合い、多面的な幼児理解、役割分担など幼児の実態や発達に即した必要な指導や援助を効果的に進めることが大切である。

ウ 一日の保育の流れ < 保育する前の準備 >

保育に臨む教師の留意すべきポイントとして、次のことが考えられる。
幼児の前に立つまでの周到な計画と準備は、幼児の遊びを豊かにし、保育を充実する必要条件である。そのためには、先輩の助言を参考に教師として主体的に取り組むことが基本である。

保育のねらいの確認

教材・教具の準備と点検

< 朝の活動 >

一人一人の幼児が登園したときから、一日の保育が始まる。そのため、幼

児との出会いとなる朝の活動を大切にしたい。

朝の活動として次のようなことが考えられる。

朝のあいさつをする。

一人一人と笑顔で言葉を交わしながら、表情や様子から健康状態をつかむ。

かばんや帽子などの持ち物を決められた場所に整理させ、活動しやすい服装に着替えさせる。

出席ノートで出欠を確認する。欠席児については、家庭から欠席届があるかどうかを確かめ、欠席の理由を把握する。

昨日の遊びのことを話したり、遊びたいことを聞いたりして、それぞれの幼児が遊び出そうとするのを見守ったり、遊びのきっかけをつくったりする。

< 保育 >

「学ぶ」は「真似る」から出発するものである。したがって、幼児は、教師の言動を見て育つという一面がある。幼児期では、教師の一挙一動を模倣することはよく見られる現象である。幼児の前に立つ時は、明るい顔、温かい態度で、熱意をもって保育に当たりたい。

幼児を理解すること

幼児の表情、健康状態などを素速く読み取り、一人一人の幼児の実態をよく把握した上で保育に臨むことは、保育の展開の充実や保育効果を上げるために極めて大切である。

言葉かけ

温かい雰囲気、幼児を見つめ、言葉を選び、分かりやすく、心の奥底に届くように言葉をかけることが大切である。保育では、常に正しい言葉を使うように心がけたい。

直接的な援助

幼児の活動を大切にしたい教育を進めるには、一人一人の幼児が着実に発達するための体験をもつように、必要な助言や援助を行うことが、教師の大切な役割であることを忘れてはならない。とりわけ、認める、共感する、励ます、手助けする、相談相手になるなどは、幼児の活動を豊かに展開することであり、体験を確かなものにするために必要なことである。また、幼児自身が生活する中で必要とする知識や技能、態度などの援助も欠くことができない。この場合、教師が一方的に知識や技能を教えるのではなく、あくまでも幼児の必要感に応じて、幼児が自分で気付いたり、繰り返しやってみる中で身に付けていくように働きかけていくことが大切である。

整理と後片付け

当日の保育の中で、使用した教材・教具などを所定の位置に返しておくことはもちろんであるが、遊びや経験する内容によっては引き続きそのまま出しておく方が、次の遊びへの発展や深まりとなる場合がある。

整理や後片付けは、幼児と共に作業する中で指導・援助をするのが効果的である。散乱している教材・教具をきちんと整理し後片付けをすれば気持ちよく、安全に過ごせることにも気付かせたい。

< 終わりの集まり >

一日の生活全般について話し合ったり、担任からの連絡をする場である。幼児がその日の園生活の中で楽しかったことやうれしかったこと、困ったことを話したり、聞いたりできるようにする。

幼児に、明日の予定を話し、活動への期待をもたせる。

一人一人の幼児が満足して生活できたかをとらえ、共感する。

担任の話や友達の話をしっかり聞くように促す。

降園の準備をさせる。

服装を整え、忘れ物がないか確かめさせる。

帰宅後の過ごし方について指導する。

迎えの保護者にも、交通安全など降園途上の事故防止を要請する。

I 体験的な活動の意義と内容

幼児期は、生活の中で自分の興味に基づいた「直接的、具体的な体験」を通して物事を知ったり、身に付けたりする最初の時期である。

つまり、人間形成の基礎となる豊かな心情、物事にかかわろうとする意欲、健全な生活を営むために必要な態度などが培われる時期である。そこで、この時期の教育は、生活を通して幼児が周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもってかかわることにより様々な活動を展開し、充実感を味わうという体験を重視しなければならない。

このように、発達に必要な体験を総合的に積み重ねていくには、幼児自らが興味や関心をもち、自発的・意欲的に活動が展開される環境を構成することが重要である。

ここでは、体験的な活動の展開の場を園内と園外に分け、それぞれの場での内容について参考例をあげる。

園内での体験的な活動

園内での体験は、身近で安定した環境の中で時間をかけて繰り返し試したり、工夫したりすることで、納得のいく活動を展開することができるという長所がある。

身近な素材とのかかり

例・・・砂・水遊び

幼稚園生活に慣れてきたものの、友達との関係が浅い幼児の多くは、砂場で穴を掘ったり、山を作ったり一人遊びを楽しむことが多い。

しかし、繰り返し活動を進めるうちに、同じ遊び場の幼児と接触し始め、互いに影響し合って遊び、砂や水の特質に体験的に気付いていく。個々のイメージ遊びから、共通のイメージや目的をもって、遊びが進められるようになる。このことから、遊びが広がり、友達といっしょに創意・工夫する姿が見られるようになる。

こうした身近な素材で体と心を動かし、友達と協力しながら進められる活動においては、十分な活動時間の確保が大切である。

身近な動植物との
かかわり

例・・・野菜作り

園庭の花々が美しく咲き誇る日、幼児たちはきれいと感じたり、蜜を求めてくる蝶や蜂に興味をもち大騒ぎをする。花が終わり、球根を掘った後、野菜類を植える。種子や苗に興味をもち、手のひらにそっと転がしたり、においをかいだり、「大きくなればいいな」、「こうなってほしいな」と期待するなど様々に気持ちを表す。

芽が出たり双葉が出るなどの変化が現れると感動の声が上がる。個々の幼児が自分の思いでしていた水やりにも、「たくさん水をかけたら芽が下向いてきてかわいそう。」とか、「『腐るかもしれない。』とお母さんが言っていた。」など、いたわったり大切にしたり心寄せる姿がある。

野菜作りは長期にわたる経験の積み重ねであるので、その存在に目が向けられない時もあるため、教師から幼児たちに働きかけが必要である。

遊具や用具との
かかわり

例・・・巧技台での遊び

様々な機能をもつ遊具ではあるが、当初は積み木と同様な扱いで満足し、基地、家、池などそのものの見立てどおりの活用をする姿がある。しかし、そういった遊びを重ねる中で、付属の部品を基本形に組み合わせ、イメージを広げる遊びになり、次第にぶら下がったり、その上を渡ったりして、友達と刺激し合い、目的や用途に応じた活動に入っていく。

繰り返し遊びを楽しむうちに、高さやバランス活動にも慣れ、更に創意・工夫をするようになり、遊びに変化を求めて自分たちの活動を広げていくのである。

偶発的な出来事と
の出会いから

例・・・風と遊ぶ

運動場に突風が吹いた日、風に舞うビニール袋を見付け、つかまえようと駆け出した幼児といっしょに教師も追いかける。たくさんの幼児たちが参加し、ようやくつかまえようとしたとき、袋の中に風が舞い込み空にもち上げることがある。「凧みたい」という気付きや「ビニール袋、ちょうだい。」という幼児たちの要求に、即応したことから、凧あげごっこが始まる。そこでは、風を集めて走る子、破れた袋を解体して、ビニールをはためかせる子など様々な姿が見られる。次の日には、ビニールだけでは凧にならないと、凧をつくる材料の要求が出たり、色を付け、足を付け、自分なりのものを工夫して作ったりする活動へと広がっていく。

このように、偶然から生まれた活動ではあるが、教師の意図も多く取り入れられ、内容の豊かな活動へと発展していくのである。

蓄積されたイメージ 例・・・ごっこ遊び

寒い日や雨の日には保育室のどこかでごっこ遊びが展開される。年少児は、女の子が少数の男の子を入れてのお母さんごっこ、男の子は剣や盾をつくっての戦いごっこ、他の活動ではあまり男女差を感じないが、ごっこ遊びになると、男女のもつイメージの差を強く感じさせる。

幼児は、ごっこ遊びを単なる模倣や役割分担ではなく、自分の心にイメージとして蓄えられていることや願望に基づいて、それぞれの役になりきり遊んでいるようである。したがって、蓄えているイメージが多様であればあるほど、活動は豊かに展開されることになる。

園外での体験的な活動

園外での活動は園内で体験できない素材と出会うことができる。

幼児たちは登降園の道での発見や感動を友達や教師に伝え、共に体験しようと呼びかけてくることがある。自分の生活圏で友達や教師と共通体験をした幼児は、物事に深く興味を示し、変化や変容をとらえる姿勢をもつようになり、その共通経験を家族や近所の子どもとの遊びの中にも取り入れたりするようになる。そして、その活動を幼稚園の遊びにつないでいく活動体験は、豊かで活発な生活を形成していくことになる。

また、幼児たちがお話や絵本に接する中で興味や関心をもつものの中に、幼稚園では経験できない建造物、場所、物などがある。

「行ってみたい。」「見てみたい。」という幼児たちの思いや、活動の広がりから経験させておきたいという教師の願いに基づき、園外指導をする。新鮮な環境、興味や関心を高めていた対象物に接した幼児たちは、自分が想像していたことや思いや印象を自分なりに動作や言葉で表現することによって、そのものと深くかかわる姿勢を見せる。そして幼稚園での活動の中に広がりや深まりをもたらすものとなる。

地域の行事への参加

幼児も楽しみに待つお祭りなどは、幼児なりに地域の伝統や人とのかかわりの場としてとらえ、昔から伝わるおみこしや太鼓の見学を通して経験させたい。

教師が目的を明らかにすることにより、日常かかわる環境であっても、その環境に向かう幼児の姿勢に変化が見える。見たことや感じたことが幼稚園での遊びの中にふんだんに現れ、描画、ごっこ遊びや表現遊びなどへの広がりを見せるなど、共通経験の成果が現れてくるものである。

その他公共施設や場所への見学など

家族に連れられていくだけの施設や場所であったものが、自分たちとの関係を知ることによって、その施設や施設がもつ役割についても興味をもつようになる。

その際、このような施設が皆のものであり、大切にしなければならないことを指導することにより、公共心の芽生えを培っていくことも大切である。

オ 行事の指導

行事は、幼児の生活に変化や潤いを与えるものであり、幼児の活動意欲を高めたり、幼児同士の交流を盛んにしたり、社会生活上必要なことに気付いたりする上で大きな意味をもつ。幼稚園生活においても、これらの行事が適切に取り入れられることによって、幼児の生活は、豊かで張り合いのあるものになり、行事をめぐる様々な体験が、発達を促すことにもつながっていくのである。

その際、外見的な展開や成果を求めたり、幼児の生活の流れや興味や関心などがなおざりにされてしまうことがないように、行事を選択し、幼児の負担にならないようにする。

(8) 安全に関する指導

幼稚園生活が、幼児にとって健康で安全なものとなるように努めなければならないことは言うまでもないが、幼児が自ら安全な行動をとれるように発達段階に応じて指導を行うことが大切である。

幼児の行動は、情緒とのかかわりが深いものである。例えば、情緒が不安定であると、注意力が散漫になり、遊びにも集中できず動き回るなどの姿が見られるものである。安全に関する指導に当たっては、特に安定した情緒の下に行動できるようにすることが大切である。

幼児が自分で状況に応じて機敏に体を動かし、危険を回避するようになるためには、日常生活の中で十分に体を動かして遊ぶことが大切である。幼児に安全な生活をさせようとするあまり、過保護になったり、禁止やしっ責が多くなったりする傾向があるが、その結果かえって幼児に危険を避ける能力が育たず、けがが多くなるということも指摘されている。

また、幼児の敏しょうな体の動きをつくるために「ある運動」を訓練するのではなく、生活や遊びの中で積極的に体を動かし、様々な動きを楽しむことで幼児が自分の体を思いどおりに動かすことができるようにしていきたい。そして、本能的に体を動かし、様々な状況に対応して、自分の身を守ることができるようにしていくことが必要である。

その中で危険な場所、事物、状況などを知ったり、危険なときにどうしたらよいかを判断したりするなど、体験を通して身に付けるようにしていきたい。

なお、安全教育の基本的な考え方を次に示す。

幼児期においては、日常生活すべてが安全教育である。

幼稚園で指導するだけでなく、家庭や地域社会の協力を得て、日々の生活の中で、その場に応じた指導をするよう、常に努力することが大切である。

教師自身が幼児の生活のすべてを理解して、必要に応じて一人一人の幼児に合った指導を行うこと。

体全体を動かして遊ぶ活動を通して、自ら身を守る力を付ける。危険なことと安全なこととの区別ができ、危険を避け、安全を守る態度や習慣を身に付ける。

幼稚園の園庭や園舎全体が幼児の遊びの動線や遊び方に配慮した環境の構成となるように工夫する。

災害時の行動の仕方や様々な犯罪から身を守る対処の仕方を身に付けさせるためには、発達の実情に応じて、基本的な対処の方法を確実に伝える。

(9) 教育活動の評価

保育の評価は、幼児の発達理解の側面と、教師の指導の側面との二つの側面から行うことが大切である。特に幼児の発達の実情は、教師の指導に大きく左右されることから、ねらい、内容、環境の構成、教師の直接的な援助が適切なものであったかどうかについて十分に検討し、幼児の発達が常に望ましい方向に向かって促されるよう、計画を改善していく必要がある。

指導計画には、「P (Plan・計画) - D (Do・実施) - S (See・評価) - I (Improvement・改善)」のサイクルが必要である。

ア 評価の視点

評価は、幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である。

幼児の発達理解に関する反省や評価

- ・ 生活の実態に関する評価
- ・ 幼児同士のかかわりに関する評価
- ・ 興味や関心にかかわる評価

教師の指導に関する反省や評価

- ・ 指導計画に関する評価
- ・ 環境の構成に関する評価
- ・ 援助に関する反省や展望

イ 日々の保育の評価

教師は、日々の保育の営みの中で個々の幼児の発達の姿から指導が適切であったかどうか反省する必要がある。

単に「できた、できない」、「上手、下手」、「早い、遅い」、「わかった、わからない」などの結果だけを見て評価するのではなく、保育の中で、幼児の姿がどのように変容していくか、その過程をとらえ、指導の手がかりを考えていくことが大切である。

すなわち、具体的なねらいや内容が、幼児の生活する姿から見て適切であったかどうか、環境はねらいや内容にふさわしいものであったかどうか、幼児は活動を通して必要な経験を得ているかどうか、教師の援助は適切であったかどうかなど、すべての面について保育の流れの中で反省していくことが大切である。

また、偏った見方や限られた側面だけを評価したり、他の人との比較によって評価するのではなく、評価は、事実による客観的な判断に基づくことが望ましい。幼児の活動の評価に当たっては、幼児の短所だけに目を向けるのではなく、それぞれの幼児のもっている「長所」「よさ」を評価し、更に伸ば

していくことが大切である。また、幼児の具体的な言葉や行動に基づいて、幼児の日常の生活とのかかわりでその理由や背景を明らかにする努力も必要である。

このような反省や評価は他の教師などからの情報も得て、多面的に行うことが必要である。

ウ 学期末の評価と新学期の計画・準備

幼児にとっての幼稚園生活は、担任を中心とした学級を基盤にして営まれている。したがって、担任が学級経営をどのような考えに基づいて行うかが、幼児の幼稚園生活や一人一人の育ちに深くかかわっている。

期末の評価は日常の担任自身の在り方も含めて、学級経営全般について基本に立ち返って見直す大切な節目としたい。

エ 一年間のまとめと展望

一年間を振り返り、日、週、月、期でとらえた課題を整理し、長期的なまとめの中で一人一人の発達をとらえることが大切である。

教育課程、指導計画の見直し

幼稚園教育の目標を達成するためには、幼児がふさわしい生活を送るための生活の設計ともいえるべき、教育課程、指導計画を年度当初に作成することが重要である。これらについて日々反省してきたことを土台にしながら、園の教育目標、幼児の発達のとらえ方、環境構成の在り方、援助の在り方などを中心に、全教職員で検討し、見直していくことが大切である。

幼稚園幼児指導要録の記入

日頃の保育を通して継続的に行われてきた反省は、各年度の終わりに年間のまとめとしてその要約を記入し、次年度の適切な指導に生かすものとして残されるだけでなく、その幼児がどのような筋道で発達しているかをとらえる記録として考えることも大切である。